

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告<12>

—平成 27 年度実施プログラムと保育士養成の観点から—

杉山章

(東海学院大学)

要 約

本学で実施している地域の子育て世代に向けた子育て支援プログラム「あそびの森」の平成 27 年度実施プログラムについて報告した。本プログラムは 12 年目を迎え、これまで実施したプログラムは本学短期大学の紀要で毎年報告されてきた。平成 27 年度は東海学院大学子ども発達学科の 2 年生を対象とした保育実習指導 I の一部として実施された。そのため学生にとっては保育実習へ行く前の学内実習となった。プログラムは 7 月に 2 回実施された。また、本稿では当日のプログラムの内容の報告のみではなく、事前に提示した学生が取り組むための枠組み、事後において学生が取り組を終えて学んだことを記載した。

キーワード：子育て支援活動 地域貢献 保育士養成

1. 実践の概要

(1) 平成 27 年度の開催について

子育て支援プログラム「あそびの森」の実践活動は、「地域の親子・学生・教員」が協働でプログラムを実践し、育ちあう」という開設時の目標を受け継ぎ、平成 27 年度で 12 年目を迎えた。親子・学生・教員の入れ替えは毎年あるものの、地域の子育て支援に対するニーズに応え、学生の実践力向上を期待し実践してきた。開始当初は、短大部が中心となり取り組んできたが、大学に子ども発達学科が開設されたのをきっかけに、それ以降は、短大部と四大部で回を分担して実施してきた。平成 27 年度は 4 大部が担当した 2 回のみで開催となった。

本稿では、従来の実践報告に加え、学生の取組について報告する。

(2) 保育士養成における課題

平成 22 年 3 月に保育士養成課程等検討会が、保育士養成課程等における今後の課題として、保育の専門性の構築と保育士のキャリアアップについてまとめている。その一つに「特に、遊びや環境を通して子どもの学びを促し、深めていくことや、子どもを観察するための知識や技術、保育の環境を構成することについての専門性を持つことが重要であり、保育士の養成の方法等につい

て、さらに検討する必要がある」と挙げられており、保育士養成において保育の実践的な力を学生につけていくことが求められていると言える。

(3) 実践方法

2 年生の授業である保育実習指導 I において学内実習として取り組んだ。保育実習指導 I は、初めての保育実習をするための準備をする科目である。保育実習は、学生にとって大学で学んだ理論と保育現場で展開される保育実践とを結びつける場だとされており、現場の保育士の専門性に触れる貴重な機会である。また、学生は保育現場に立つ者として実習先から評価を受ける場でもある。

そこで、今回の学内実習を「初めての実習」として位置づけ、外部の保育実習をする前に、大学における学びと実習による学びの橋渡しをする役割を持たせることにした。

保育実習指導 I の授業開始時に保育現場の観察やボランティア経験などを受講学生(2 年生)に聞いたところ、保育現場を参観したことがほとんどなく、ボランティアも含めて子どもと関わった経験が少ない学生が多かった。そのようなことから、保育実習で要求される子どものかかわり、教材準備や教材研究、保育者としての立場など実習で要求されることに対してほとんど実感のない学

生、それらを意識しているものの実習を不安に感じる学生がいた。受講登録者は37名であった。

2. 実施プログラム

今年度実施したプログラム名と担当者を表1に示す。

表1 平成27年度あそびの森プログラム

回	実施日	プログラム名	担当者
1	7月4日	七夕会をしよう!	杉山
2	7月17日	あっついなー!夏!	杉山

3. 活動報告

(1) プログラム1

実施日・会場

平成27年7月4日(土)保育実習室「あそびの森」

午前の部 10:00~11:45

午後の部 13:30~15:15

ねらい

「七夕会をしよう!」

おにいさん、おねえさんと一緒に楽しい七夕会をしよう!星の世界を楽しもう!

参加人数

子ども33名、保護者22名

参加スタッフ

教員6名、学生17名

内容

午前の部と午後の部で異なる学生スタッフが担当した。

<午前の部>

1. はじまりの会

- ・七夕の話(劇)

2. コーナー遊び

- ・お星さまボウリング
- ・きらきらわなげと七夕の短冊作り
- ・天の川づくり

(天の川の貼絵をし、壁面飾りを完成させる)

3. おわりの会

- ・絵本の読み語り
- ・作ったものの紹介
- ・活動の振り返り

<午後の部>

1. はじまりの会

- ・七夕のペープサート劇

2. コーナー遊び

- ・お星さまをつろう!

(棒の先端から糸を垂らしその先に磁石をつけたもので、クリップのついた星をつる)

- ・七夕のポップアップカードを作ろう!

(半分に折った画用紙を開くと、七夕の図柄が立ち上がる)

- ・おりひめぎゆうー!(浮沈子づくり)

(ペットボトルの中に弁当用ポリエチレン醤油容器と水を入れて作る)

3. おわりの会

- ・絵本の読み語り
- ・作ったものの紹介
- ・活動の振り返り



図1 第1回活動の様子

給括・考察

総じて子どもにとって楽しい活動になったと思われる。コーナーが少なくて時間が余ってしまうと心配し教員がパラバルーンを用意したが、使用することなく終わった。参加した子どもの人数は例年と比べ、多いとは言えない状況であった。しかし、子どもたちは実習室に固定されている大型の遊具に気が移ることもなく、気に入ったコーナーを保護者や学生と何度も繰り返して体験・挑戦する姿が見られた。そのような子どもたちの姿は、将来の課題を追求する姿にも通じると捉えると、よい活動になった。

学生の取組には、準備・練習不足な面が見られた。劇のセリフが暗記できていないため自信のなさが感じられる、製作するものの試作品が受付開始の直前に完成する、事前に保育実習室を確認しているものの部屋の大きさや各コーナーの間からするとコーナー自体や準備した教材のサイズが小さなものになってしまう等であった。

そのような状況であったにもかかわらず、子どもがかわいかった、思ったより楽しんでもらった等の感想が学生から聞かれた。

(2) プログラム 2

実施日・会場

平成 27 年 7 月 17 日(土)保育実習室「あそびの森」

午前の部 10:00～11:45

午後の部 13:30～15:15

ねらい

「あっついなー!夏!」

おにいさん、おねえさんと暑さに負けず遊ぼう!

海、山、川で楽しもう!

参加人数

子ども 22 名, 保護者 16 名参加スタッフ

教具 6 名, 学生 19 名

内容

午前の部と午後の部で異なる学生スタッフが担当した。

<午前の部>

1. はじまりの会

- ・ 大型絵本(「へんしんトンネル」)の読み語り

2. コーナー遊び

- ・ おさかなとりわなげ
(輪投げでいろいろな魚を取るゲーム)
- ・ サマーボウリング
(魚や虫のピンを倒すゲーム)
- ・ 海でたからさがしをしよう
(新聞紙ボールの中で宝物を見つけるゲーム)

3. おわりの会

- ・ 作ったものの紹介
- ・ 活動の振り返り

<午後の部>

1. はじまりの会

- ・ カードゲームをしよう
(2 チームに分かれカードをめくりあう)

2. コーナー遊び

- ・ 折り紙あそび
(ヨットやさかなを折って海の背景に貼り記念写真)
- ・ おさかなレースをしよう!

(自分のさかなを描いて作り、そのさかなを竿の先に付いた紐につけ競争するゲーム)

- ・ 暑い夏を投げとばせ!!

(ボールを投げて的の穴に入れるゲーム)

3. おわりの会

- ・ 作ったものの紹介
- ・ 活動の振り返り



図 2 第 2 回活動の様子

給括・考察

参加した子どもの数と学生数がほぼ同数で、参加者にとってはゆったりとした場になったものの、学内保育実習としては少々寂しい場となった。しかし、子どもたちとじっくり関わることができる場となった。

午前の部では、間が持たない状況ができてしまったので、おわりの会の直前に、教員が場にいる全員でパラバルーンを使って遊ぶことを提案した。パラバルーンを上下させる役、バルーンの中に入る役を、学生と親御さんや子どもたちと交代して楽しんだ。教員として、学生にとっても初めての場であり成功して終わってほしいという思いと外部の人をお迎えしてのイベントであるという思いからの対応であった。

午後の部では、学生が提示したルールとは違う遊び方でとても楽しそうに遊ぶ子どもたちが自然発生的に出てきたことに対して、学生が臨機応変に対応せざるを得ない状況ができた。少し戸惑ったように見えた学生であったが、その状況を認め一緒に遊びを楽しむ姿が見られた。大人が設定した遊びが、必ずしも子どもたちにとって楽しい遊びではないという状況は、子どもとかわる仕事においては、よくある状況だと考えられるため、うまく対応できた。

4. 保育実習指導 I における取組

本稿では保育実習指導 I(2 年生対象)において、学生の取組をどのようにサポートしたかを明らかにしたい。

(1) 取組について

①学内実習のねらい

シラバスにおける保育実習指導Ⅰの目的「保育実習の意義と目的、実習の内容を理解し、課題を明確にする」に照らし合わせ、以下のようなねらいを設定した。

- ・学内実習を通じて、子どもとその親御さんとの接し方を学ぶ。子どもたちの前に立ち、指導者・支援者としての立場を学ぶ。

- 子どもの保護者と接することを通して、子どもの育ちの背景にある保護者の存在について考える。
- 子どもと適切にかかわるスキル(適切なことばの使用、目線を合わせる等)を身につける。
- 自分自身の保育力を理解する。

<実習計画>

表2のような実習計画を提示する。

②学内実習計画

ア) 実施計画

次のような指導方針・指導計画のもと実習を実施する。

<指導方針>

学生に次のような望む姿を設定し、その姿が達成できるように学生を指導する。

- 一人ひとりの学生が取組に対して責任をもって行動する。
- 発達段階による子どもの姿の違いを知る。
- 子どもの興味・関心や、感情の表出、幼児期の学びの特徴について知る。

イ) 実践の枠組みの提供

以上のような学内実習を実現するために、次のa)～c)による実践の枠組みを提供する。

- a) 学生の各グループ(1A, 1P, 2A, 2B)を、4つの担当(全体会, コーナー1, コーナー2, コーナー3)に分ける。
- b) 各回の実践テーマと全体の構成, 基本的なシナリオ, 全体の構成が教員から提供されることで, 学生が各コーナーの準備に専念できるようにする。実践テーマは, 取組時間の短さと学生のボランティア経験の少なさを

表2 指導スケジュール(全8時間)

日付	区分 (時間)	学生グループ分け(時間数)			
		1A	1P	2A	2P
6/5(金)	通常授業日(1)	概略の確認 取組の意義, 方法, 昨年までの様子確認 学生グループ分け ・1A=第1回開催日午前担当グループ ・1P=第1回開催日午後担当グループ ・2A=第2回開催日午前担当グループ ・2P=第2回開催日午後担当グループ (1/8)			
6/12(金)	通常授業日(1)	全体計画の確認 コーナー別に企画作成 (2/8)			
6/19(金)	通常授業日(1)	コーナーの準備(3/8)			
6/26(金)	通常授業日(1)	コーナーの準備(4/8)		全体計画の確認 コーナー別に企画作成 (2/8)	
7/3(金)	通常授業日(1)	コーナーの準備 全体の通し練習 (5/8)		コーナーの準備(3/8)	
7/4(土)	第1回開催日(2)	午前プログラムの実施 省察レポート(家庭学習) (6・7/8)	午前プログラムの実施 省察レポート(家庭学習) (6・7/8)		
7/10(金)	通常授業日(1)			コーナーの準備(4/8)	
7/17(金)	通常授業日(1)			コーナーの準備 全体の通し練習 (5/8)	
7/18(土)	第2回開催日(2)			午前プログラムの実施 省察レポート(家庭学習) (6・7/8)	午前プログラムの実施 省察レポート(家庭学習) (6・7/8)
7/24(金)	通常授業日(1)	まとめ 省察レポートの交流(実践上の気づき) (8/8)			

を理由に変更不可能とする。実践テーマは、実施季節を考慮したものにする。

・実践テーマ

第1回開催日

「七夕会をしよう!」:おにいさん、お姉さんと一緒に楽しい七夕会をしよう!
星の世界を楽しもう!

第2回開催日

「あついなー!夏!」:おにいさん、おねえさんと暑さに負けずに遊ぼう!
海、山、川で楽しもう!

・シナリオ

表3のようなシナリオを提示した。第1回と第2回のシナリオの変更点は、「七夕」「夏」に関わるキーワードのみで、会の基本的な流れ(はじまりの会、主活動、おわりの会)やセリフは同一であった。また、シナリオについては、学生の工夫により変更できることが伝えられた。

なお、会の流れについては、図3の2パターンが提示され、学生が選択する。

c) コーナーごとの企画については、図4、5の用紙を用いて、コーナーの遊びや活動の基本的な流れと、運営に必要なものを具体的に構想し、教員へ報告する。

ウ) 振り返り

最初に、自習直後、振り返りを行う。学生が一番感じていることを話し、参加した教員が取組についての助言をする。次に、学生は一週間後を目処にレポートを提出する。観点は①担当したコーナーの準備について、②子どもとのかかわりについて、③他のコーナーから学んだ

ことの3点である。

実習後の授業では、互いのレポートを交流し、取組全体を振り返る。

(2)結果

①準備

学生は2~3名のグループに分かれ、そのグループで活動の計画を立てた。学生が企画したコーナーは、前項に掲載したものであった。なお、全体会を担当した学生は、主活動の間、コーナー1~3の担当を補助した。グループそれぞれがテーマに基づいて遊びや活動を決めた。教員は、テーマに基づいているか、実現可能かを問うた。学生は、活動を考えることができて、「テーマに基づく」ということが難しいようであった。

コーナーの企画が決まった後は、教材・教具、小道具などの製作に取り組んだ。(図6)教員は、学生と製作の場を共有し、学生の相談にのったり、出来栄について認めたりしながら助言した。

当日の直前には、会場なる保育実習室(あそびの森)にてリハーサルを行った。リハーサルの際は、コーナーの配置の調整やコーナーの展開、準備スル物の調整をした。また、教員は、話し方(目線、声の大きさ、話すスピード)、セリフの暗記を含め、幼児やその親御さんとのかかわりについて助言した。また、挨拶や髪型・色、服装、アクセサリーの扱い、清潔(爪など)、携帯電話の扱いなど、保育者としての基本的な出立ちやマナーについても、事前に指導をした。

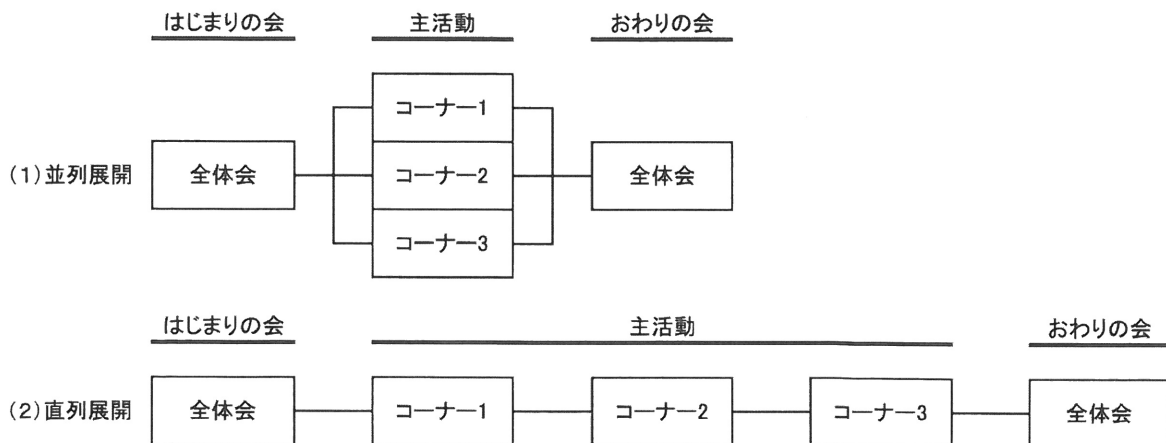


図3 学生に示した展開パターン

子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告<12>

表3 全体進行シナリオ
あそびの森 全体の進行

	進行(セリフ)	備考
1	<はじめの会>	
2	みなさん！おはよう！（こんにちは）	
3	今日は、あそびの森へようこそ！	
4	あそびの森に来たことがある、お友だち！	
5	反応を見る	
6	あ、いっぱいいるね。	
7	はい、ありがとう。手をおろしてね。	
8	じゃあ、初めて来たよっていう、お友だち！	
9	反応を見る	
10	初めて来たよっていうお友だちもいるね。ありがとう。手をおろしてね。	
11	今日は、来たことがあるお友だちも、初めて来たよっていうお友だちも、みんな、楽しんでね。	
12	まず、〇〇先生にお話をしてもらおうよ。お願いします。	
13	◇教員あいさつ	
14	〇〇先生、ありがとうございました。	
15	ねえねえ、今日は、何をして遊ぶの？	
16	うん、今日はねえ…あ、なにか音楽が聞こえてきたよ。	
17	耳をすます。七夕の歌の伴奏、1番のみ	
18	ねえ、この歌知ってる子いる？	
19	よし、じゃあ、みんなで、せいで言ってみよう。	
20	せいのうで！	
21	(たなばた…のうた…)	
22	そうだね、七夕の歌だね。	
23	じゃあ、みんなで歌ってみよう！お家の方も、一緒に歌ってください！	歌詞の巻物
24	歌う	
25	そうそう、七夕には、こんなお話があるんだよ！	
26	読み聞かせor寸劇	
27	おりひめさまと、ひこぼしさんは、あえてよかったね。	
28	幸せになってほしいね。	
29	みんな、七夕のお話はよくわかったかな？	
30	反応を見る	
31	さあ、次は遊びのコーナーだよ。どのような遊びがあるか、お兄さん、お姉さんに教えてもらいましょう。	
32	各コーナーの紹介をする	具体物
33	コーナー遊び	
34	<おわりの会>	
35	あれ？音楽が聞こえてきたよ。	
36	あ、本当だ！音楽が聞こえてきた。	
37	そろそろ、お片付けできるかなあ。	
38	コーナー担当者も、そろそろ終了してください。	
39	はい、じゃあ、みんな、最初の場所に集まって！	
40	(ひとつひとつのコーナー遊びで楽しかったこと、つくったものを確認する)	
41	(例)〇〇コーナーでは、〇〇をつくったけど、つくったものを、おにいさん、おねえさんに、見せて！	
42	(例)わー、きれいにできたねー！…いっつかほめる…ありがとう。じゃあ、お家に帰ったらお家の人に見せたり、お家で飾ったりしてね。	
43	(例)〇〇コーナーでは、うまくボールが入ったかな？楽しかったね。うまくできたかな？うまくできた人！	
44	(例)また、お家に帰ったら、お話ししてくださいね。	
45	では、〇〇先生、ひと言あいさつをお願いします。	
46	◇教員あいさつ	
47	はい、〇〇先生、ありがとうございました。	
48	今日のあそびの森は、これで、終わりです。	
49	お兄さん、お姉さんが、トンネルをつくるので、中を通って帰しましょう。	
50	また、次のあそびの森で、バイバイ！	
51	バイバイ！	
52	節屋の出入口にトンネルを作り、親子を送り出す。	

杉山章

コーナー企画書

グループメンバー(主担当は氏名の前に○)

1. コーナー名

2. コーナー分類(どれかに○を) 製作タイプ 遊びタイプ その他

3. コーナーの説明
(1) コーナーに来た子どもがすることを順序だてて書く

子どもがすること	できるとき(○)や、できないとき(△)にすること ※声かけや手伝い

(2) 準備するものと個数

4. 計画

	全体	グループ
6 / 12 ねらいの確認 全体計画・確認 コーナーの計画・準備		
6 / 19 コーナーの準備		
6 / 26 コーナーの準備		
7 / 3 コーナーの最終準備 役割分担確認 通し練習		

図4 コーナー企画書

物品調査票

実施日(○をつける)	7 / 4	午前	午後	
コーナー名				
メンバー (○) リーダー				
必要物品				
名称	種類(○をつける)	量	入手・収集方法	
			メンバー	チーム 教員 ある(ありそうな)場所
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		
	備品 消耗品 リサイクル	ある たりない ない		

図5 物品調査書

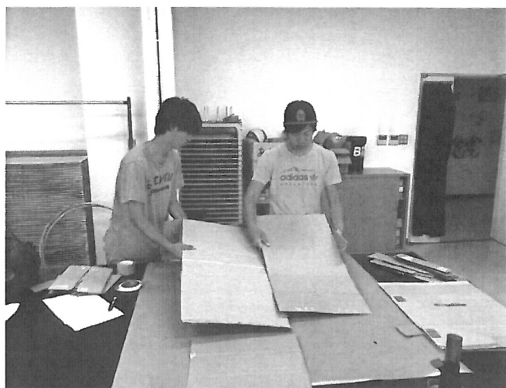


図6 準備の様子

②当日

前項「3.活動報告」を参照。

③振り返り

学生が記述したもの(ア～ウ)を列挙する。内容が重複するものは掲載していない。

また、事後の授業で小グループにより個々のレポートを交流した。そこから得られた記述(エ)を掲載する

ア) 担当したコーナーについて

【成果】

- 「短冊に願いを書くコーナーに夢中になっていたことが意外で、子どもたち一人ひとりに願いがありその個性がしっかり表れるのだなと思いました」
- 「途中からこどもの目線に立って考えないと子どもたち皆が楽しめないのではないかと思います、極端に難易度を下げたり、少し上げてみることを繰り返したり、マスを華やかにすることができた」
- 「年齢によってハードルを下げたりすると、よりその子が楽しめるあそびになると思いました」
- 「あらかじめ端の方に折り紙を貼って見本のようにしておいてよかった」
- 「新聞紙が散らかることを想定して段ボールでまわりをかこった」
- 「新聞を破るのがとても大変で苦労したのですが、当日になって子どもたちが喜んで新聞であそんでいる姿を見たら頑張ってたよかったと思えました」
- 「完成したペットボトルは子どもに可愛いと言ってもらえた」
- 「(コーナーの名称を)おさかな取り輪投げにしたことで子どもたちがお魚をつかまえにこよときてくれたこと」
- 「自分たちグループで作ったものが子どもたちがどう

いった反応をしどうやって遊ぶのかを見れたことで課題も見えてきたのでそれが成果」

- 「日頃の授業から何をしたら子どもが喜ぶかを考えて必死に考えた出し物だったので、子どもたちが喜んでくれたことがとてもうれしかった」
- 「一対一(保護者あり)で子どもとかかわることができ、じっくり、ゆっくりと遊ぶことができた」

【課題】

- 「司会の練習不足。もっと進行を話し合うべきだった」
- 「一人ひとりにあった対応ができなかった」
- 「子どもの発達に応じて折り紙の教え方も変えなければならぬと感じた」
- 「最初に想定していたルールのある形の遊びでは年齢に合わなかったように感じられる」
- 「年齢に合わせて縄の大きさを変えたり棒の間隔を変えた板を用意すればよかった」
- 「もし多人数だった場合、待っている子どもにどう対処すればいいのかを考えておく必要があるだろう」
- 「年齢によってハードルを下げたりすると、よりその子が楽しめる遊びになると思いました」
- 「机の配置の仕方も、子どもを囲むように学生が座る配慮か、学生を中心とした配置か、などの行動動線を踏まえて、もう少し考えるべきだった」
- 「切れ込みのところにマークを入れてある画用紙を用意していたら、もつと子どもにあったものになったかなと思った」
- 「人が増えてくると説明できないときがありつらかったので、声かけなどもっと必要だったと思う」

イ) 子どもとのかかわりについて

- 「ぬいぐるみをもってきてくれたが、どう言葉を返したり、どう行動すればよいか分からなかった」
- 「子どもの声が大きくて、自分の声が届かなかったこと」
- 「言葉だけでは伝わらないので、行動で示さないと行けなかったこと」
- 「三年生ぐらいでも話を聞いてくれない子がいた。〇〇先生は、お母さんに声をかけておられました。お母さんも育てなければいけないのだなと思いました」
- 「二回注意すれば聞いてくれるだろうと思っていたが、あまりにも聞いてくれない子が年長あたりに多かった」

- 「園児なのに字を書いていた。英語で書く子もいたので、最近の子はこんな年から英語を習っているのかと思いました」
- 「泣いてしまったときにどうすればよいのかわからなくて対応ができなかった」
- 「自分たちがどういう風に接するかで、子どもの対応も変わってくるのかなと思いました」
- 「「つ」という文字の向きが反対になっていたので私たちから見て簡単そうに見える文字でも子どもにとっては難しいことが改めて分かった」
- 「子どもは年齢によって体力差があると思っていたが、同じ年齢でも、子どもによってかなり違いがあった...一人ひとり発達のスピードが違うことを学んだ」

ウ) 他のコーナーから学んだこと

- 「少しただけで遊びたいと思わせるような豪華さも必要。準備が大変でも遊びたいと言う好奇心を誘うような見聞にしたい」
- 「N(学生)さんが子ども同士の事故で困っていた子に進んで声をかけていて冷静な判断が凄くいいと思いました」
- 「子どもたちの間で今何が流行っているのかを知っているのも保育者として重要な能力の一つである」
- 「子どもが思いっきり身体を動かして、楽しめて、でも安全にできるような遊びを考えて行けたらなと他のコーナーを見ながら思いました」
- 「一つの遊びから発展できるような工夫や子どもたちが遊びたくなるような雰囲気作りも大切だと言うことが分かりました」
- 「もし次があるなら子どもたちの心に残るような遊びを提案したい」
- 「シンプルで分かりやすい遊びから、プラスしていくことで年齢の高い子どもも工夫して遊べるような遊びにする。そういった方向から遊びを考えていきたい」
- 「大勢の前で話すことのむずかしさを知った。声の大きさ、早さなど、大人ではなく子どもと話しているのだと言うことを意識するようにしたい」

エ) 授業の中での交流より

事後の交流を通して、学生が記述したことを挙げる。

【保育者として重要だと感じたこと】

- 「子どもの年齢や発達段階に遊びを合わせるように変

えていくということ」

- 「もっと視野を広げて困っている子を見つけたりしないといけない」
- 「発達段階や一人ひとりの性格を知ること」
- 「子どものことを一番に考える」
- 「子どもたちがより一層楽しめてのびのびできるように工夫したりする」
- 「その子が自分に伝えたいことは何なのかを子どもの行動や発言など。小さなことからくみ取っていくことが大切」
- 「親御さんにも安心してもらえるような声かけ」
- 「準備がすごく大切」
- 「子どもについて理解していないと子どもとかわかるときに言葉かけや援助などがうまくできないと感じた」
- 「教材研究をしていないと、子どもにあった遊びかどうかや、どうしたらうまくできるかが分からないので、子どもとする前にまず、自分でうまくいく方法を見つけていくことが大切」

(3) 考察

事後の学生のレポートから、学内実習に対してマイナスの感情や思考が現れたレポートは見られなかったことから、学生は「体験してよかった」と感じていると捉えられる。実習未経験の学生が記述している内容は、授業の中で何人もの教員によって、何度も取り上げられている内容ではないだろうか。学生が学びを再構成する・実際の実習をイメージする上であそびの森の運営は「実習」として十分に機能する取組だと考えられる。ただし、実際の実習は、実習施設の保育方法が多彩であるため、「あそびの森」の体験が生きるかどうかは今後の課題となる。今回の取組は2年生を対象とした保育実習指導Ⅰ内での取組であった。保育士養成の観点からすると学外実習をする前の最初の「実習」であった。そのような状況において、学生が実習の意義を見出すことができたことは、実習に対する構えをつくるという意味から保育実習指導Ⅰにおいて取り組む価値はあったと考える。

ただし、学生全員が、同じ学びができたかどうかは分からないので、個々の学生の気づきを学生の中で共有する取組は必要であろう。本稿では、学生の主な記述を掲載したにとどまったが、今後は、その内容について、質問紙を活用したり、自由記述を詳細に分析したりする必要がある。

5.全体の総括と今後の課題

平成 27 年度の取組では、詳細な検討は必要であるものの本稿で考察した学内実習としての成果はあると考えてもよいのではないかと。しかし、子育て支援プログラムとしては、子どもや保護者の対応に慣れない学生であったことは、各回の報告の中で簡単に触れたものの心配な点である。参加した子ども達と学生がじっくり触れ合える状況ができたこと、子どもに合わせてルールや遊びを変化させたことなどで、学生が精一杯対応したことは保護者にも伝わったと考えたい。全ての回でトラブルもなく笑顔の参加者を 1 組ずつ見送ることができた。

保育者養成にあたり、学生が保育における実践的な力をつけていく過程を、規定の学外実習と学生の自主的なボランティアにのみ委ねていくのか、養成施設である程度支えていくのかは、簡単に答えが出るものではないかもしれない。今後の課題としたい。

参考文献

保育士養成過程等検討会（2013）保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)、厚生労働省。